

社会医学研究会発足50周年にあたって

日本社会医学会理事長 上 畑 鉄之丞

今年、社会医学研究会(略称「社医研」)が発足して50年目にあたります。社医研は、太平洋戦争や朝鮮戦争が終わり、日本の社会も平和を取り戻しつつあるなかで、医療や保健など社会保障の枠組みの構築に目がむけられ、国民皆保険の時代が始まったばかりの時期に発足しました。創設には、日本衛生学会や公衆衛生学会、産業衛生学会、農村医学会など、当時の日本の社会医学をになう多くの学会から、意識的、意欲的な多くの研究者が参加し、国民のための医療や保健の政策をめぐる様々な議論を交わしたと聞いています。医学書院発行の当時の「公衆衛生」誌には、毎年の総会研究会の発表論文の要旨が掲載され、70年代になって医師になった小生も、社医研に参加し、その内容や議論に強い関心を持ったことを覚えています。会員数は必ずしも多いとは言えませんが、マンモス化した公衆衛生関連の学会の中でも、キラリと光る存在感のある学会で、リーダーシップを発揮した研究会でもあったと記憶してします。

社医研(社会医学研究会)は、その後90年代になって日本社会医学会と名称を変更しますが、両者を通じての50年にわたる歴史では、社会発展の矛盾のなかで生まれた様々な国民の保健や医療の諸問題を取り上げ、社会的解決にむけての努力を被災者とともに続けてきたと思います。振動障害や頸肩腕障害、慢性腰痛症などの「合理化」による労災職業病の認定問題、新産業都市の大気や水質、土壌の汚染や防止問題、水俣病やイタイイタイ病などの公害病患者の救済対策、カネミ油症などの食品汚染被害者や森永ヒ素ミルク中毒被災児の後遺症の究明や被災者の救済、サリドマイド、薬害エイズから最近のタミフルにいたるまでの様々な薬害問題や過労死問題など、それぞれの時代における国民や働く人たちの困難で共通する課題を多くとり上げるなかで、解決の道筋を模索しつつ、他方では、保健師や養護教諭など、地域の保健や医療の向上をめざす公衆衛生専門家や住民の取り組みにも力を注いできました。さらに、80年代には「社会医学研究」誌の発刊に踏み切り、90年代に「日本社会医学会」に名称変更してからも、ホームレス問題や職場の精神疾患や自殺の多発問題、児童・生徒や教員の健康問題、アスベスト被害や過労死・過労自殺や健康格差のひろがりを取り上げるだけでなく、健康の意味そのものを考える提起をおこなってきました。第50回を迎えた今日、私たちや先輩諸氏が脈々と築き上げてきたこうした社会医学研究の歴史や活動をこれからどのように継承し発展させるかが、これからの大きな課題です。

学会理事会は昨年秋、第50回総会を迎えるにあたって、今夏の札幌総会時に、なんらかの節目の講演かシンポジウムを行うことを計画し、今年3月末の東京での理事会で、「社会医学研究」誌が年2回刊行可能になったのを機会に、「私と社会医学」と題する会員諸氏の意見を募る企画を計画しました。新しい学会の歴史を迎えるなかで、多くの方からの意見や論文が学会誌に反映されることを期待します。